竹雑録

洋学文庫
文庫8
F 21
1

文庫
F21
1

紅葉山文庫

眼窠骨集會ス凡者七　分内外部

前頭骨　衝骨　上顎骨　以上外部

頰骨　楔骨　篩骨　蓋鬱骨　以上内部

司眼目神至

瞳神至　二對　動眼神至　三對　運車神至　四對　分布神至

牽引神至

夫近視ハ眼面中央比常稍高隆起物象光輝失如常不能達
網膜故近接物体以適度也老年ハ適度血液稍衰其高隆ノ
処自扁平ヲ十人故十リ
遠視ハ眼面扁平之所致故光輝聚映在角膜後部而交又ヲ
十人壁裏老眼ノ不遠隔物象如不能同明

芦眼石

試法以一豆粒許投熱火燬之其色帶黄者劣白者次之

此出金銀坑治ノ処漢人漫存金銀ノ屑、此物亞鉛気造化土中凝成スルモノナリ 試以此物煉赤銅則変成黄鍮

真珠

主治小石灰牡蛎ノ品相類澄清濁頃制伏法様ノ創ナリ故酒浸酸敗則以燬製真珠投之後淳酒此不異石決明蛤石屬

做熟目ニ点スルヤハ以酸劇増疾痛ナリ

龍鬐 麝香

此二品芳香透竅開達閉塞補衰弱、都テ熟眼ニ用スルヤハ赤脉疼痛ヲ増進スルナリ其呈辛其性温熱ヲ以テナリ

寒水石 滑石

碎之塊ニ悉方研燬之萬轉毫末悉方秘

石膏

発表清涼解熱退醫膜

製亞鉛点熱眼中芦眼石ニ勝ルトス

丹砂銀朱

別其質其治彷彿丹砂ハ天生其質水銀硫黄ヲ以テナル銀朱

用人所作之丹砂ナリ 因水銀存主穿透細條纖絡出駆邪毒

清澄眼液 多忘用乃水銀ノ劇勢刺衝シテ発疾痛赤膜

乾燥眼

物ヲ見テ不爽明原因疫病大病後気衰弱者雖然熟試之ナ

カ七ハ自梅毒

瘻管篇

其毒浸淫巣節骨攻耆巣即閉塞ヲナス遂使巣孔不通而其部諸液変膿様ヲナス。　説者云因瘻裏生腫瘍瘻夜化膿此撮空ノ論ナリ若瘻裏生瘍瘻膿ス則其部炎疼而自大皆腐蝕シテ胞膜ニ至ル〳〵ト何斷〳〵待積久哉、此瘻夜膿汁ニ代セザル理顕著ナリ　軽症ハ宜在瘻裏外面施繃帯

眼瞤動　原因痼癖

雀目

病因蛔虫胃中汚穢人於暑月患之至処不拘時候而係此病亦有之此膽管閉塞而膽汁逆行者及腐敗夜混血中者ハ

アツテ鼾声甚者

粘液ハ面色疾白神脱シ脈納吹五体痺弱爵閉ノ症候女ナシ

半身不遂　ラムヘイドテスハルフリガームト

此症ハ昏睡醒テ後ニ残ル者初十四五ノ間ニ不治必不治トス

都テ痲症常ナキ笑性ハ昔夜脚ヲ痒笑スルニ頼ル此凝体ニ就クノ病ニメ脚ニ左右ノ別有ル故半身各部ニ位ス

水腫

脚気腫腹水胸水ノ三種アリ近世種供二行ワル尤モ京師ニ多シ水腫ニ二症アリ王壽所謂脚気水腫アリ蘭人ノ所謂肚腹水腫アリ何レ血中水液ガ脂膜内ニ溢漏スルヨリ発ス○脚気ハ五月頃ヨリ秋ハ八月九月頃ニ至テ止ハ最繊緩弛緩ヨリ発スルナリ肚腹水腫ハ四時供ニ有リ世ニ脚気ト云フハ流行病ノ一種ニシテ初メ心下痞満スルヲ覚ヘ脚重ダルクテ微腫ヲ或ハ麻痺スルアリ或ハ麻痺セザルアリ漸ク小便短少ニシテ赤ク疾歩スレハ短息ス

又其一種危アリ脈消ニシテ駅数百里奔リガ如クニシ

テ肩息シ小便短渋ニシテ赤ク口燥キ面色蒼灰自ニメ冷
汗洗フガ如ク是レ水胞腔ニ溢満シテ肺ニ迫ルノ候ナリ
故ニ患者平臥スルヲ能ワズ漢人コレ卿気衝心スト謂フ
則チ西醫ノ所謂胞水ナリ此症功養シ難シ宜分胞術ニ非
ザレハ能ハズ凡リ水腫ハ塩ヲ絶シメ食減セシムベシ○
又胃ノ不和ヨリ来テ肚腹膨脹ス尚脹飲ニ水腫新方ヲ撰
三因ニ或ハ健胃通又脉絡弛緩ヨリ来ル者ハ下剤ヲ用ル
布ルナリ○又腹水ハ緩症ニメ初ヨリイツトナク肚腹車ヲ覆ヘ
テ巨大ニナリ終ニ脚腫ル大率鼓腫ノ如シ鼓脹ハ風気ヲ蓄テ脹
シ腹水ハ水ヲ蓄テ脹ルナリ此症ハ初発ニ効テ陰ヲ加ヘザレハ発ニ
薬効ナキニ至ル 此初発腹鋪縛術ヲ施シ口ニ塩羹ヲ禁シ食量ヲ
減シ表気ヲメ閉シムル一勿レ
凡水腫往再トシテ来ル者ハ理砂法ヲ処テ薬ヲ用ヘシ・塩ハ閉
塞セシムル故ニ禁ス

霍乱吐泻 クルム ヨントステーキング

此発暑頃発上湧下泄シ津液微ニシテ数時之間ニ目陷リ手
足厥冷額上冷汗シ或ハ一身冷テ唯心下ノミ微暖アルニ至ル

アリ而鍼灰瞳神至ノ近傍ニ聚會而妨碍其部ノ運轉白益
ニ在テハ瞳神全憤激シテ不失其機於黄皆網膜所写映之
来景以減少諸器官能亦從之遲後当此時脱瞳神全病毒ト
相激スルノ勢因之労困シテ力不能支始閉塞シテ次補其
疲虚如之日久ハ粘液混入硝子液中変而青盲ヲナス者
往々有之此実天竇発ノ一症アリ其先天タルヤ白昼時使
患者仰臥頭微鏡ヲ以其瞳口ヲ窺見ルニ微油黒翳横于瞳
口上恰モ水上ニ毛毫ヲ浮ルカ如シ其常ノ雀目タルヤ
從強膜分際至白膜之部有黄色油ニ如散金屑或青黒ノ班
点者モアリ此胆汁迸行混血中現出白膜者ナリ

不真眼

硝子液曇暗網膜神丞ノ衰弱衰亡ニ因ル一物両形三形半形水晶液生班点曇或偏移位置又内障初発或黄赤色ヲ見ル人黄胆ニ因ス或網膜脈肥大者ニ因ル

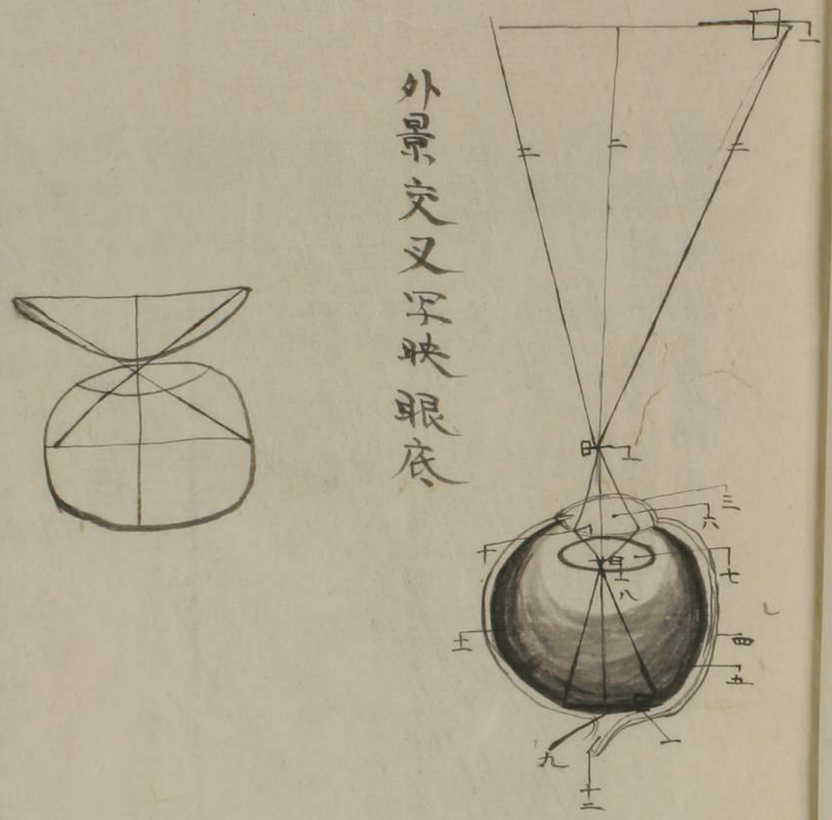
痘疹

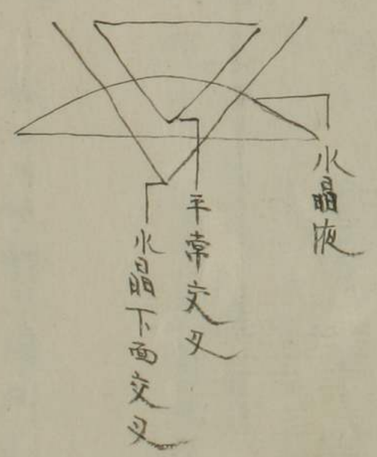
在羅患痘疹ノ間眼目腫脹者痘疹ノ常症十リ落痂後十日二十日後患善眼目者気力衰諸液減ノ弊ニ乗シテ胎毒吹患残在ノ毒擾乱シテ牽テ及眼目

散大眼

頭扁胃中汚物湿毒胎毒産後瘀血蛔虫ニ因ル蒲萄膜油絡シテ頑麻或衰弱セシム

縮小　其因前症ト稍同





新宮原亭慶治方

傷寒　フルコウトヘイド

傷風ハ俗ニ云風ヒキニテ蓋気ノ閉塞スルヨリ発ス其因内外ノ別アリ内因ヨリスルハ気血ノ壅滞スルヽ有テ表気漸窒リ外因ヨリスルハ身暴カニ寒風ニ觸レ露湿ニ当リ忽チテ表気窒リテ発ス然ルトモ其病症ヲ顕スニ至テハ同シ其治方ニ於テシ皆其表気ヲ発スルニ在リ●然レ漫ニ発汗スレハ身之揮発塩発泄シテ四支怠惰心下悸動不寧怔忡ノ諸症ヲ発ス故ニ汗ヲ発スルモ其閉塞ニ應テ蓋気ヲ発シ余ハ再ヒ不閉ヤウニ保護スヘシ若之症脈数テ咳嗽アル症稟置肺病ノ危ニ至ラン或問傷風ハ必外ヨリスル乎答曰内鈌ルヽ有レハ風寒必襲フ外感トノミ論シ難シ

傷寒

先初全発汗ナリ保シ表気胃ニ進ハ和ナル吐剤ヲ用ユ之ヲ用シハ発汗ス西医ノ説ニ吐方発汗ヲ兼ヌトイヘリ保シ其人元気不振ハ叨ニ吐方ヲ慶ズ●此症膳汁過多人ニハ忽チ舌

胎ヲ生シ又黄里色苔ニ変ハ硫黄ノ類ヲ用ルニ至リ症ニ従テ刺絡発泡脚湯ヲナス●又此症十四五ヲ経テ自然ト血中ニ膿ヲ醸シ自然盗汗トナリ或ハ小便膿塗ヲ泄スナリ是将治候ナリ

●此症忘語メキ足挙セザルハ死此遠カラス

痢病　ローデロープ

此病初秋流行ス盛暑夜涼ノ頃夜気表気ヲ襲テ遂気内陥膿汁腐壊ヨリメ変ス此又表発気陥ヲメ発汗セシム其重症ニ至テ体痛咽逆蟲如数初発ヨリ血便ヲ下ス此ホハ初ニ吐剤ヲ用テ敗汁胆汁ヲ取ラサレハ或救ヒ難キニ至ル又稀水ヲ下スニ至ルハ悪シ

此症屠奥腸ヲ洗フ如キ血水ヲ泄利シ脈滑ニメ力無キ者ハ直ニ腸脱庭ニ変テ死ニ至ル此症時死ハ利止拙解シ食進キ足厥此症ニハ速ニ篤麝香油ヲ以灌腸方トス此其脱庭ヲ防タメニ西医ニ就テ彼治ヲ親験スルニ其初吐方ヲ用ヒ次大黄阿片ヲ滴メ用之腸扁甚者篤麝油ヲ以灌腸剤トス昼夜三四次行フ又血水ヲ隔シテ神至疫利ノ如キハ必阿片灌腸ヲ変ス唯其唯其常症ハ石灰菊花ヲ以灌腸ス都テ痢ニハ灌腸ヲ指クヘカラス又蓋気ヲメ閉シムヘカラス何モ毒盛タラハ必夜服ニ阿片ヲ用ル機ニ通ヘシ徒ラニ大黄ノミ用シハ痢止ス内剤シテ発ニ至ル又阿片ノミ用ヒテ大黄ヲ用ルヲ知シハ患ヲメ横死セシムルナリ

温疫　ベスト　疫厉有三種　温疫　腐敗疫　神至疫

温疫ハ天地間一箇ノ毒気ヲ醸シ此気ヲ呼吸スルモノ必此患ニ罹ルナリ初発骨動シタル如ク憎寒頭扁體扁発熱傷風虐ノ如ニ寒熱往来セス●此症十四五日ニメ下血スルハ腐敗ノ徴ナリ初発ニ下血スルハ甚宜シ日ヲ経ハ必死セス

神至疫　セユーロールツ

其初メ大ニ疲癆シタル如ク五体怠惰シ憎寒発熱スルナリ此症秋夏ノ間ニ発スルハ夏初ヨリ泄瀉アリ重症ハ血水ヲ下シ甚ハ八九間日ニ腸脱庭トナリ或ハ下剤ヲ発シ猶衣摸狀錯乱シテ死ス

腐敗疫　ロットコールツ

此因ハ胃腸ニ汚物留滯シ胆汁此カタメニ悪性ニナリ発此外ニ
此ハ内ヨリ醸スモノナレハ其初発ニ吐剤ヲ処ス
此症五体疲労シタル如ク頭痛悪寒発熱脈数無力咽乾初発
舌苔白滑漸黄変ニ黒ク芒刺ヲ生スルニ至ル●都テ此症ハ本
胃腸汚物ヨリ発スルナレハ止痢剤ヲ用ユル内ニモ腸胃ヲ疎滌シ鬱蒸
ヲ鎮抑スルヿヲ忘却スヘカラズ●又此症モ熱ノ脳膜横膜ニ着ハ
精神錯乱譫言循衣摸床ホノ症ヲ発ス此酸果清熱ノ者ニ宜
シ又此症ニ蓋露水一般膏薬トス或下血シ或面色蒼黄色ニ変
シタルハ半ヶ月ニ鉄精ヲ滴下シ用ユ
卒中風　ベルーデ
此因ニ症アリ粘痰ニテ脳ヲ窮迫スルアリ多血沸騰シテ
脳ヲ壅遏スルアリ此刺絡下剤灌腸法
又粘液ヨリ来ルハ頻々ニ硝砂精ヲ嗅シメ花枯散ヲ一身ニ貼
或ハ蒔蘭ヲ以テ一身ヲ摩擦シ此症刺絡スレハ患者立ロニ
タヲルヽニ至リ●外用ハ カヤプウーテ油 テヘンテル油 葉精
香ヲ塗ルヘシ
灵血ノ者ハ脈供数ニメ面赤色四支挙急痙急窘迫ノ模様

此可怖症ナリ而此症灵ハ腹痛ナキ者アリ医速ニ雞肉汁美ニ
大麦煎ノ如キ気味ナキ飲醤ヲ飲シメ亡液ヲ救且灌腸シテ
其苛液ヲ甘クスヘシ此症ヲ足冷モ腹熱敷カ如キ昔ナリ腸痛ヲ
発ハ腸炎腫胃痛胃炎腫ナリ
又腹痛十キ症ハ病毒去テ之液スル故ニ薬汁ヨリハ大麦並汁カ
雞肉汁宜シ此復快スト並モ小便不通者油斡スヘカラズ●又
乾霍乱ト云テ腹痛割カ如ク腹怒脹スルハ峻下剤ヲ与テ快
利ヲ取ルヘシ
泄瀉　ロープ
泄瀉ハ四時共ニ有ト並モ初夏秋ニ多シ此胃腸停滞シタル
飲食ヲ元運精気自然良能ニテ停物ヲ送出スナリ●此症胃
腸粘液ヨリ来ルハ白粘物ヲ雜ヘ下ス風気アルハ泡沫有テ天
失気ヲ発シ胆汁沸騰シテ下ル症ハ大便鮮紅ニシテ女ク熱発
ヲ肛門ニ覚ユ皆下剤ヲ用ユ
此風気アツテ腹脹スルハ飲食腐敗スレハ風気其物ヨリ分出ス
肺炎腫
肺腫ハ天資痩削シテ肩夫テ胸肋匾ク頸長キ人ニ発ス此体

人ニ灸シ此症初ル部ノ如ク寒热往来初ヨリ咳嗽アリ
何トナリ思迫スル気某アリ脉納数咳ル毎ニ胸中ニ響キ其
発汗シテ解ズ迫ヘ肌熱強フシテ食某常ノ如ク遂ニ肺癰
候ヲ顕スナリ
都テ痈腫ノ症ハ初ニ放血スルヿヲ要ス然レトモ大量血ヲ放子
ハ益ナシ痈腫ノ肯綮スル二ニテ放子ハナラヌナリ乳汁ヲ用ユベシ
肌熱甚者ハ清涼薩膳ヲ用ユ
我或富人ヲ療セシニ寛胸創亜麻仁油河元浸ナト兼用ス
先野牛乳汁ヲ食トシテ治セリ肺癰トナリテハ難治トス
肺癰 ロングスウエール
此ハ痈腫ノ膿潰シタル症ナリ保シ肺癰ヲ看定スルニ濁唾腥
臭ノミヲ以テスルハ蒙昧ノ至ナリ伏症ハ決テ膿疼ヲ吐スル者ニ
非ス劇症ハ膿肺外ニ破潰ス故ニ口中一点ノ膿モ吐出スル者ニ
シ又肺ノ一葉全膿熟スル一アリ此レモ膿ノ出サル一有リ
此症膿ヲ醸シ疼唾ト共ニ尊出スヲ佳トス此外ニ潰レハ胸膿
トナル故ナリ
蘭館出入ノ富人ノ子息真肺癰ニ已ニ昧蒙ニ在リ予ニ治ヲ請フ

診之寒热往来肌熱燥カ如ク脉一分時百三十二七動咳嗽急迫
此病人ヲ蘭医ハーケン二見セシニ此肺ニ粘液ヲ結ヒ痈腫夫ヨリ
来ルモノナリト云大蒜泡ヲ右胸ニ貼ス葉ハ アラビヤユム ヲシス
水ニ入レ別ニ ケレモニヤツクコム 芨宮熬膏 ケレイン ヲ九トナ
シ用ユ且三十匁ノ血ヲ放ナ日ニ水邊ノ気ヲ呼吸セシム且
山野ヲ彷徨セシム此ヲ用テ漸々ニ治シタリ然ト至翌年再発
シテ死ス

胃痛 ニーグペイン

此大抵飲食ス消化ヨリ来ル者十ニ七八此症荏苒トメ来
症俗ニ胃痛ト名ク初ハ胃中苛烈酸液ヲ嘗ヘ呑酸嘈雜ア
リ遂ニ恵液胃ニ浸刺スルヲ覚ヘ飲食下導スル一能ワス
若ハ八九年モ痛テ後ハ胃ノ襞積弛解シテ胃ノ下只肝部
ニ在テ胃底脳部ニテ低下ス此ヲ按ヲ診フニ腹雷鳴軟弱
ニメ力ナシ此ニ至朝食夕吐ニ至ル之ヲ翻胃ト云此遂ニ顔足
浮腫シテ死ニ至ル●此因蚘ヨリ来ルアリ胆汁苛恵ヨリ来ル
ルアリ飲食不化胃ノ糞孰恵ノ酸苛粘凝ヨリ来ル●峻下
剤ヲ以スレハ反テ危ニ至ルベシ

都テ胃痛ノ諸病ハ吐剤ニ吹シハ根治シ莫シ下剤ニテハ胃ノ悪液治スル能ハス此時アリ一向薬モ功ナキハ虫粘液内ニ伏シテ有ルナリ此阿魏膏ヲ患処ニ貼シカストールヲ用ヒハ蛇虫ヲ下ナリ又生漆一盞ヲ頓服スレモ宜シ予ア故郷ニ在シ頃漆ヲ製スル野人傳フ又漆酒ヲ用テ一鉢ニ赤疹ヲ発シ胃腸膜痛ノ能ク治スル丁有リ予按ニ是ハ胃横膈腸間膜ホノ實質ニ悪液凝結シテ塊ヲ為ス処ニ切アリ又胃痛症ニ其因ヲ探テ適薬ヲ用ヒ其薬ノ功有ルニ乗シテ腹痛変ニ散シテ痛ヲ起シ或ハ熱ヲ発シ或ハ腹一面ニ痛ミ或ハ歯痛頭痛ト為ル丁有リ此ヲ知ラサレハ事ニ臨テ狼狽シ其薬ヲ日ニ轉シ患者ハ頻リニ苦ミヲ訴ヘ遂ニ定見ナリ疑ヲ起スナリ

翻胃 スウアツリーグ

此ハ胃痛久ク續キテ後ニ変シ来ル治法ハ胃ノ纖維ヲ健カニス且收斂シテ飲食ヲ養ルカヲ強ル剤ニ非サレハ治セス三ア西医プレードホフニ此方ヲ傳フ失肉冠油ヲ日ニ胃ノ部ニ擦シ食量ヲ定メ健胃駆風ノ散薬ヲ用ユ其方熱定竜脳十分 麝香一分 一ツ子シヤ丸 一支 肉豆蔻膜ニ丸 右十包トシ二日ニ用ユ

薄荷油六滴 ペイクル

胸膈痛 ヨントステーキング テスリツペンフリース

炎熱脈数十ルハ軽ニ非ス熱ナキハ粘液ホノ胸肋膜ニ着シナリ殊ニ横膈ニ附着スルハ尤呼吸ニ懸ルナリ横膈ノ炎痛ハ胸腹ト症候同シテ精神錯乱奇異息迫ス● 何レ刺絡ヲ主トス鎮炎ノ唐涼後和ヲ用ユ

呑酸 ヒアーグシユール

嘈雑 ヨウプリスペン

吃逆 ヒツキ

此神経病ニ属シテ吸気肺ニ深ク動リテ胃ニ空気送込リヤラレ発スト何神経率急ニテ吸気ヲ以肺胃ニ迫ナレハ鎮経剤ヲ以テスヘシ

腸痛 コレイキ

俗血積ト云又婦人ニ発スル者ハ血積疹血ト呼フ此風気粘液胆汁ニ因テ起ル常ニ夏シ又腸間異物閉塞スル発ス此症ノ腰重キヲ覚ヘ広塊ハ腸間膜ニアリ

腸炎腫瘍

夏日霍乱吐下腹一部処ヲ定テ痛ミ熱アリ後和蘭剤ヲ用ユ炎痛甚者ハ刺絡又唐涼後和灌腸ヲ施ス此症劇ク空

滿脹痛小便不通ル者灌腸浴傷ヲ施ス

眩暈 タラーイング

脳髓病視神至ニ係ルナリ灸血ヨリ来ルアリ毒液ヨリ来アリ
七情ヨリシ脳虚弱ヨリス又血虚ヨリスルナリ皆神至脳常ノ
動カニアリ

震 デルデレタージスコールツ

此暖国海邊ニ次ク寒国又ハ山谷ニヨシ西医ヘールケヨリ奇
方ヲ得タリ葱根ヲ生ニテ三四本ツヽ生テ喰フナリ発ルニ当テ
白湯大麦並ヨリ外用ヘカラス

扁風

此暑湿瘴気ヲ感冒シテ発ス表温散ヲ主トス

宮廷亟脚病

此症卒然トメ四肢挛急物アリテ小腹ヨリ衝逆シ咽ニテ奔上ス
吁吸息迫言ヒ能ス又常ニ気心下ニ尉滯シ頻ニ伸脚暈或ハ
頭痛夜睡ヒヲ能ス悪心スアリ或精神煩燥スルアリ此奇テ
今日ノ事業ヲ忙シク勤メ身体ヲ労動セシムヘシ尤宜ハ旅
行ナリ此症劇ハ廣傳崩ヲ施スベス又脚病ヲ兼ルアリ此患

安逸ノ人ニ多シ

愛気

此飲食ノ宜食悪クシテ胃ニ風気ヲ生ス粘液ヨリ来ル亦多シ飲食
調理悪キ者ヲ食スルカ又風気ヲ生スル者ヲ食スルカ何レ破気
剤ヲ用ユ須手トメ治シ難者ニ腹痛ニ変ス吐剤ニ宜シ

此肉飲食腐敗スルヨリ生ス

脚気 呻心 和蘭脚水病

此大方其主初秋ニ発ス其初心下秘閉飲食化ス両脚麻ル水
短次水腫ノ治ヲ施スヘシ麻痺甚者両脚ニ灸スヘシ水次
者ハ塩気ヲ禁スヘシ予此後症ニ胃健酒ヲ用テ功ヲ得ル尤緩
維他後ナル者再発シ易シ

腹水

此腸胃ノ他後裏弱ヨリ発ス急ニ強性分利剤ヲ用ユヘシ唯粘
液ヨリ来ル者ハ止ルヲ得スシテ下ルモ有リ又鼓脹ハ按シテ
弾力アリ拍子声アリ甚ハ青筋怒脹シ此大ニ脹レ息迫セス
又此症内藏ノ痛腫ニ因ル者アリ●又腹内粘液瘕瘕ヨリ来
ハ利腸飲ニ宜シ

悪阻

此症振寒二月ノ初ヨリ発ス其初発熱悪寒外感ノ如ク心下秘口ニ酸某ヲ感或ハ物香臭ヲ忌憎ト劇症ハ吐メ薬餌モ不下殆ト危ニ至ル不食メ裏エズ子宮ニ微動指ニ應シ唇紅ニシテ眼中黒白ノ能分ルアリ治法唯和ニ大便不秘ヤウニ腸胃ヲ疎除スヘシ

蚘虫

飲食不消化ヨリ生ス常ニ腸ニ在リ蚘アル人ハ時アワテ腹痛シ或ハ食ヲ吐シ忽チ腹脹或ハ食貪リ此ニ一奇方アリ生際二十匁ヲ用ユ カストルソーリー也宜シ 粉末蚘虫ヲ包理スル故ニ容易腸中ヨリ不下ナリ

癲癇

河魨ヲ服メ発スル一有リ此風気ヲ破ル故ナラン コレスル云此病腹内ニ一箇ノ弾力アル風気ヲ生スト

腸嘻

西医粉末ヨリ来ルニテ吐剤ヲ用ユ不可信 此食道軟燥皺襞密小ノ類ナラン 又肺俞ニ灸メ胡椒丁子ノ如キ辛味ヲ用テ治スルヲ見ル

喘息

肺ノ変急ニ因ルアリ粘痰ニ因ルアリ 結石ニヨルアリ 肩脊ニ灸シ且常ニ其部ヲ掩フ煖スヘシ

気絶

揮発香竄ヲ鼻ニシム気血亡鉄ヨリスルハ竜蟹ヲ以ス

吐剤

太早朝空心ニ服ス 吐酒石ハ粘痰ヲ稀釈スルヲ以テ其吐物水ノ如 爪蔕ハ苦版ノ酷烈ノ性アルヲ以テ痰ヲ粘リス 吐根モ爪蔕ニ同シ

瘧

瘧奏莫解者発時一首前ニ常山ヲ冷服メ治スアリ 都テ神圣病吐血咯血喘息胸肺甚盛者ホニハ吐剤ヲ禁ス誤ル〻ナカレ

衆剤吐剤ヲ用ル前ニ其人灸血ナレハ必放血スヘシ

卒中灸血ヨリスル者ハ放血百六十匁ニ及フベシト

肺胸膜ホ炎腫ハ百四五匁放血スヘシ

大灸ヲスエ膿潰セレムルハ毒ノ深メ発泡ホノ不及処此金呼

毒ノ意ナリ
温泉ノ功桑汁後加メ諸脉纖維ノ疎通スル者ナレハ爵閉ノ
病ニ功アリ
灌腸方小児老人二十匁ヨリ六十匁ニ至ル大人ハ六十匁ヨリ
百二十八匁ニ至ル 此レ[テリケルスノ法ナリ]
糞創
内臓ノ病ニ必功アリ
葉創 二十二分
下 吐 桑汁
清涼 温 煖 麻糜 駈風 解石 通経 鎮痙 利尿 殺虫
復酸
都テ油類ハ下創ナリ

第一方
ケルスト 一握 右一斤半水ヲ以テ煮ル一時濃過シ
テ滓ヲ取リ而后 蜂密 四匁 或八匁 良好酢 十二匁 或十六匁
右二呈ヲ加ヘ常ノ飲創トス
第二方
吐根 二分 大黄 三分 三厘
第三方
吐酒石 五厘ヨリ 六厘六毛迄
右四十八匁ノ水ニ溶解シ漸次ニ吐之発ル迄用ユ 此創酒
石量ヲ減シ水ヲ増ヤハ小児ニ用ユベシ三ヶ月ヨリ一歳半迄ノ
小児ニハ小茶匁ヲ以テ吐ノ来ル迄用ユ
第六方

センナ葉　四匁　此二四十八匁ノ温湯ヲ注キ而　清浄ニシテ
自四匁至六匁　サルセトリセンセ（エンバルスピツテルソウトノ美キ）　二匁　或四匁
右二果ヲ加ヘ半時或ハ一時浸出シ濾過シ一度或ハ二度ニ
煎フ

第七方

大黄　末　蝋枯石　末　各二匁　ローム酒石　八匁
右烏末一茶匙ヲ用ユ

ローム酒石　六匁　硫硫　アロンスヲルトル　白ツルシヤ（コールシユールビツトル アールデ）　各二匁
右散トシ一茶匙ヲ用ユ

第十方

タマリント　十六匁　ローム酒石　四匁
右四十八匁ノ水ヲ以テ煮テ八匁或十六匁ノ桂露ヲ加フ

第十三方

カニードレイス　蘭名　ラーケ　エイケ　立良サキ　ドイセンドギユルデンコロイト
茴薄　野菊花　各一握　右一斤ノ温湯ニ浸出シ而后
清浄酒石塩ヲ二匁加合シ濾過シ毎二三時半茶盞ヲ服ス

第十四方

ヨクシメルギルスチキユム　海葱　十六匁　タルタリユスヒトリヨラチユス
四匁　水　六十四匁　醋密　霍香精或杜松精　四匁

第十五方

ゼーアユエン　細末　海葱　一匁　ローム酒石　清浄硝石　各四匁　桂　末
二匁　右混和一日三度一茶匙ヲ用ユ

第十六方

ドイセンドブラット　根及茎　羅甸ミレホリユム　薯花　石　ハコロモ草　フーフブラット

羅甸テュシラーゴー 各八匁 款冬 アルニーカー花 代用ヤブレカサ 四匁

右二一斤ノ温湯ヲ注キ能密閉シテ火ニ上セ煮ル半時ニ而冷シ蜂密八匁或十二匁ヲ混和ス

茶局ニ貯ル スペシース ペクトラレス ヲ茶トシ用ル亦可ナリ

第十七方

蜀葵根 エーレンプレース 野麹 サーリー 紫蘇 各一握

右油剉而蒔蘿子(ケルサード)或大茴香(ステルアニスアニス)一匁ヲ加ヘ茶トシ用ユ

第十八方

甘草 ま フロレンテイーンセリス 羅甸イーリスフロレンチーナ 花菖蒲ノ類 大茴香

ブロイシカルデーソイクル 尊色氷糖之義ナリ 各等分

第十九方

海葱醋密 八匁 単味醋密(ヨリシメルシムプリーキス) 十六匁 アニスノエッセンチヤ

茴香浸 自五分至一匁 右舎利別トシ一茶匙ヲ用ユ

第二十方

丹砂精 一匁 蕃薇蜜 一匁三分三厘

第二十一方

上好撫皮 八匁 右土鍋ニ入レ九十六匁ノ水ヲ以加能密封シ煮ル半時濾過シ次ノ茶創ヲ加フ 樟脳 二分 丹砂精 一匁

蜂蜜 八匁

第二十二方

ウイルデハレリヤーン 春ノヨミナメシ 四匁 アルニーカ花 野菊花

右九十六匁ノ温湯ヲ注キ和ナル温煖ヲ以テ二三時浸出シ濾過シ而后

樟脳 二分 丹砂精 二匁

一ノ舎利別 八匁

第二十三方

甘巴且杏（去皮）　二匁　苦巴且杏　一匁　以二四十八匁ノ水　四匁ノ砂糖ヲ加　搗テ薄キアヘンデルメルキトナシ而　樟脳　揮発鹿角塩　各二分　右溶解

第二十四方

第一方麦水飲　四十八匁　阿片　五厘　右溶解

第二十五方

樟脳　一厘六毛（五厘二至ル）　三厘三毛　清浄硝石　一分六厘　アヘン子シヤ　三分三厘　小児ハ年齢ニ従テ半分或四分一六分ノ一ヲ與フ

第二十六方

ローデボーリュム　林右脂　十六匁　樟脳　五分　右混和

野菊花　接骨木花　各四匁　ボーチンメール豆粉　十二匁　銀密陀（リタールゲイリュム）四匁　樟脳　一匁　十六匁　右合密ナル木綿ノ小嚢ニ入レ貼之

第二十八方　大黄舎利別　海葱醋蜜　各半分　右度ヽ一小茶匙ヲ與フ

第廿九方

拖皮　八匁　右百四十四匁ノ水ヲ以煮ル四分一時濾過シ而メ

蜂蜜　八匁或十二匁　チンクチュールチスボーター　橙汁製鉄色浸　八匁　右混和此ヲ三度或ハ四度　半茶盞ヲ服ス

第三十方

明礬　一匁　右新鮮乳汁一ピントヲ以テ煮テ而濾過シ　次ノ創ヲ加フ　白糖　十六匁

右毎一時半茶七ヲ服ス

第三十一方

リキコールアノディニュスホフマン　二匁　エツセンチヤカストレウム海狸腺浸
ラウダニユムリクイデユムセイデンハム　各一匁　右自十六滴二十滴
迄服之

第三十二方

熱皮　六匁　イスランスモス　四匁　モスナキ中ハ蜀葵八匁ヲ用ユ
右新鮮乳汁一ピントヲ以テ煮濾過シ次ノ創ヲ加フ

蜂窩　八匁　或十二匁　右一拳盞ヲ用ユ

第三十三方

樟脳　一匁　右新キ亜麻油十六匁ニ溶解シ蓋餡シタ
ハカルヒ油　茴香　自五分至一匁　右混和身塗創朝夕之ヲ
塗ラシム　膜瘡スル片ハラウタアニムヲ加フ

第三十五方

ヘ子千ヤ石鹸　各四匁　大黄　一匁五分

第三十六方

揮発硫砂精　二匁　溶解シタル樟脳　一匁五分
右亜麻仁油八匁ヲ以軟膏トス

第三十七方

茵蔯　十六匁　カルムスヨルトル　メーストルヨルトル　各八匁
ラウリールベツセン　月桂子　十二匁　ゼ子ーフルベツセン　杜松子　二十匁
セーミンダウシーセレナシー　胡蘿蔔子　八匁　右合燒酒六分ピントノ一ヲ加ヘ
二十四時ノ間和ナル溫熱ニテ浸出シ濾過シテ　酒石塩　八匁
右溶解シ服量小硝子盞ヲ以テ服ス

第三十八方

海葱 末四匁　橙皮 三匁　葡萄酒 百九十二匁

右合程好温煖ヲ以テ浸出ス

第四十方

酒石塩 三匁　右二強キ葡萄醋ヲ沸騰ヲ現ザル迄加而

水四十八匁　蜂蜜 十二匁

第四十一方

ゴムアムモニアシ　ヘ子チヤ石鹸 各三匁　甘草　金硫黄

ヒユヽリヤーエキス（地錦苗蒲敷）剤 各一匁

右合草醋蜜ヲ以テ三厘三毛ノ九トス　七八九ヲ用ユ

第四十二方

カラスヲルトル　根茎　キリツテンヲルトル　中根茎 各四匁　甘草

ポツリホウト　サツサフラス 各二匁　小茴香 一匁

右三斤水ヲ以前煮テ至二斤

第四十三方

蝋蛞石 末 三分三厘　硝石 一分六厘　金硫黄　樟脳

各三厘三毛

右散トス

第四十五方

レープルブラット 山愈菜　紫蘇 各八匁　右二葡萄酒四斤ヲ三分

ニスルノ一ヲ加（二十二時和ナル）温煖ニテ浸出シ濾過シ而

蜂蜜 十二匁　右溶解シ毎日二三度適宜ニ服用ス

第四十七方

キナ末 八匁　ニトリユムアンチモニー（洗薬用鉱ヲ製ス残渣ヲ以製ス）樟脳加砂糖研末

者 五分

第四十八方

蕪根　火炙　各一握　右三ピント水ヲ以テ煮ル一時濃過シ毎一ピントニ葡萄醋　四匁　蜂蜜　百一匁至二匁

第四十九方

新鮮レープルブラット絞汁　八匁　梅骨木コンセルフ　二十四匁
蝋蛞石　末　四匁　清硝石　二匁　樟脳加砂糖末　一匁
右合コンセルフトシ二三度肉豆蔻大ヲ用ユ　若レープルブラット
トノ新ケヲ得サル片ハ菜局ニ貯フルコンセルハコリレアリア及
ナスタルチーアクロアナシーヲ用ユ

第五十方

レープルブラット精　八匁　皮菜エッセンチヤ　二匁　海塩精　一匁
薔薇蜜　四匁　右混和

第五十一方

皮菜エッセンチヤ　四匁　ゴムラックエッセンチヤ紫鉚　四匁　レープル
ブラット精　十二匁　薔薇密　四匁

第五十二方

硫黄花　八匁　白糖末　四匁　硝石　二匁
右混和一茶七ヲ服ス

第五十三方

アンチモニユム末　八匁　白糖末　四匁　桂支　一匁

第五十四方

硫黄末　八匁　砒砂　二匁
右合為軟膏

第五十五方

新鮮家猪脂　十二匁或ハ二匁

白汞丹　二瓦　新鮮家猪脂　二十四瓦

右家猪脂ノ代ニ二十四瓦ノユンリアントポマートヲ混和スルヲ良トス

第七十二方

セイムピュス　ディアコディー　罌粟倉剤別ニ種　八瓦　丹砂精　一瓦五分

右四十八瓦或六十四瓦ノ水ニ和シ屢一匕ヲ服セシム

第七十五方

吐根　一重ヒモ強　蝋蛞石　細末　白糖　各二分

右合為散剤

第七十八方

清海硝石　四瓦　薔薇コンセルブ　三十二瓦

右合糖蔵剤トシ法則ニ従ヲ肉豆蔻大ヲ与フ

第七十九方

ウェーグブラート　車前　赤薔薇　エイケンロールブ　樺葉　各握

右一ピントノ水ヲ以テ煮沸テ后水銃剤トス

第六十方

上好撫皮　八瓦　石銹鉄粉　極末　二瓦

右分合テ十二貼ヲ為ス

第六十一方

丹砂精　一瓦　ラウダニュムムリクイデュムセイデンハム　三十滴

霍香水　三十二瓦　右合合

第六十二方

亜麻仁搗末　ドルレケルブル　ヒキューター　接骨木花　各等分

右加乳汁鳥糊剤

第六十三方

リキユール　テル　ラホリアタタル　タールリー
フルーイバール　アゼイニグシュール　ホットアス
メリッセ　膏　草　露　四十匁　右合匂　四匁　ヒユーリヤー舎利別　一匁三分

第六十四方

焼酒溶解スル　樟脳　一匁　エム　プラストデメリロート　十六匁

右唇軟膏　獸皮或綿布ニ塗リ用之

第六十五方

水　九十六匁　ロートアゼイン　密陀醋　一匁五分　右外創トス

第六十六方

ヘンケルヲルトル　八匁　ヘンケルコロイト　デイルル　ケルフル　ヘン
ケルサート　各四匁　右三介水ヲ以テ煮應過飲創トス

第六十七方

蝋蛞石　八匁　白糖　ヘンケルサート　蒔子蘿　硝石　一匁

右唇散一小茶匕ヲ用ユ

第六十九方

乳汁　水　各十二匁　巴旦杏油　三茶匕　白糖　二匁

右温テ水鉱創トス

第七十方

大黄舎利別　海葱醋蜜　各等分

第七十一方

生水銀　四十八匁　右二重ノ木綿袋ニ入レ一介ノ水ヲ加ヘ
土鍋ニ入レ密封メ煮ル四分一時或ハ半時ニメ其水ヲ取リ
用ユ其水銀ハ再用ユヘシ

第七十二方

鬼茱萸脂　三匁三分　白糖　二分五匁

右研和シ剥皮ノ巴且杏三ケヲ加ヘ久和メ八匁或ハ十六匁ノ水ヲ加ヘ（エキヱルシヲトシ尚他ノ舎利別ヲ次ニ加フ此創四歳ノ小児ニハ初メ半分ヲ用ヰ入用ナル件ハ一時右ニ一ケ半ヲ與フ幼児ニハ其齢ニ從テ三分又四分ノ一ヲ與フ

第七十三方

セーメンサントニシ　茴蒲子　白糖　各四匁

右合十二包トシ朝夕其一包ヲ用ユ

第七十四方

鬼茉莉　末　一厘六毛　大黄舎利別　二匁

眼目究理篇

吉掌童蒙ヲ開ンカ為ニ又師ヲ請フ願ハ教ヲ聞シ答曰好哉汝其学ヲ勉強メ乃体フ予ノ教ユルモ亦快意ナラスヤ今眼中造物希ノ妙功ニ中テ手掌物影ヲ見ルノ理明説スヘシ第五十章眼中ノ図ヲ照見スヘシ

○a b c d e ハ眼目ノ外套ナリ此物三襲シテナル一ハ角膜眼目ノ央中ニ處シテ甚ノ透明ナリ而其形大約切断スル円球ノ如ニシテ眼球ニ固着ス是ニ由テ眼球ノ凸形ヲ造成シ而メ此膜又珍瑤クシ一膜ト共ニ混ス a b e ハ葡萄膜ナリ是レヲ虹彩ト名リ茲ニ円孔有テ丈ヨリ外影ヲ朝セレム是レ則チ瞳子ナリ c d ハ視神在ナリ此物外影ヲ感シ而メ此ヲ稀神ニ送輸シ精神為ノニ感觸ヲ越発ス其細胞眼内ニ布蔓シテ周テ b i ノ脆薄ナル一膜ヲ織成ス是ヲ網膜ト名リ

○条下將ニ掲示スル如リ凡人ノ見ル処ノ物影尽ク此網膜

ニ映ス其理殆ント眼許喝墨面ノ如レ
眼許喝墨面ヲ択シテ闇室ト云フ是レ和蘭ノ畫工常ニ夾
影ヲ図スルニ当テハ闇室ヲ造リ而其室ニ小孔ヲ穿チ其
孔ヨリ外景ヲシテ室ニ透映セシム今人ノ普ク知レル処
ナレハ敢テ茲ニ論セス精義ハ別ニ考定ノ書アリ

○造物者硝子ニ代ル各種ノ液ヲ眼中ニ所在セシメ又精妙
ノ機関ニ由テ其液透写ニ造成セシル其液概レシ三種ト
ス其一α β ハ水晶液ナリ此色甚タ透明ニシテ其質難凝結
ノ如キモノヨリ経営セシム其難固各一液ヲ保有スル此
液 C d e ノ一筋膜ヨリメ包纏セシル小カ為ニ其形チ微
笑状硝子ノ如シ其膜甚タ微細ノ織維ヨリ成ルカ為ニ茲
ニ名ケテ毛様数帯ト謂フ

○其二ハ水様液是レ C b a e ノ全隙ニ充滿ス其液脱出ス
ルト雖モ又容易ニ再生スルモノナリ固中班點ヲ以テ名
ス冒ク照見スヘシ

○其三硝子液是眼球ノ後面ノ空隙ニ充滿シ恰モ溶解スル
硝子ノ如ク其液水様液ト比スレハ粘稠ニシテ水晶液ニ比
スレハ柔軟ナリ而シテ網膜ヲ推低シ面冒ノ部位ヲ
処シテ以テ水晶液ヲ進退シ外景ヲシテ明カニ網膜ニ映セ
シム

○汚今是レニ由テ造物者ノ造成スル自然術書ヲ理會スヘ
シ

○甚タ透明ナル角膜外景ヲシテ穿透シ眼底ニ射入セシメ凸
円ノ水晶液外景ヲ収縮シ且轉側シテ面冒ニ網膜ニ達ス
又此脆弱ナル造成ヲシテ漫ニ損破セサラシメシカ為メニ
造物者ノ妙功ニ由テ三重ノ膜ヲ製造シ其尤モ上面角膜
ヲ以テス是ニ由テ物ヲ眼球ヲ損傷スルノ者ナル所以ナリ○人其精妙ナル造
成ヲ理會スルヤハ造物者ノ精功誰カ賞セサラシヤ唯カ
驚歎セサラシヤ実ニ人功ノ得テ能スル外ニ非ス是故ニ
人身ノ造成ヲ推尊シテ至テハ驚歎スヘキ一世界トナス
ハ論ナシ無血ノ小虫モ亦驚歎スヘキノ魁物タリ彼レニ
謝スルニ何ヲ以テセシヤ内カ安全ヲ保持シ内カ幸福ヲ
得ントス欲セハ常ニ恭敬シテ忘ルヲ勿レ

○今此ナ此眼球ノ造成ノ理會スルニ由ナ若先ツ人ノ外
影ヲ見ル何者ノ物ヲ其所以ヲ見ルヤト云ノ理ヲ明説ス
ヘシ予既ニ人ノ目物ヲ見ニ者テハ其物体ノ光気線網膜
ニ射入スルノ理ヲ説明スベシモ茲ニ再説メ其餘義ヲ中
明スヘシ

○第五十一図ニ於テ再ヒ眼中ニ外影ヲ透映セシメ且ツ此
ヲメAPBノ線ヨリ光気ヲ眼中ニ射入セシムル物ト
為カシムヘシ然ルトキハ第BBノ角膜ヨリ外影透徹シテ
水晶体又此ヲ集縮轉倒シテ網膜ニ達ス

○問曰其外影逆映ス然レモ我眼中ニ其レヲ見サルハ何ヤ

○答曰然リ物影網膜ニ映スルモノ總テ逆倒ス

○問曰然ル ニ我輩ノ順正ニ見ルハ何カ故リ

○答曰此理唯意識ノ監定ニ関係ス

○凡リ物影ノ網膜ニ映スル然リ逆倒スルヽ由テ五輩然リ
其物ノ所在スル如ク見ルノ鑒定ヲ得然ル所以ンノモノ
ハ他ナシ五輩名物ヲ見ヤ如リ自己モ而見レカ故ナリ見
故ニ物影網膜ニ映スルノ順逆ニ營セサルノ理又且物影

網膜ニ逆映スレハ是故ニ意識順視トナシ若シ之ニ及レ
テ物影網膜ニ順映スル中ハ意識却テ逆視ス

○若シ人物影ノ網膜ニ映スル如ク見トセハ試ニ就テ轉倒
シ而脚ノ間ヨリ物影ヲ窺ヘシ然ル中ハ其外影以前網膜
ノ下部ニ映スルモノ今及レテ其外影網膜ノ上部ニ映ス
然ルニ逆視セサレハ何ノヤ假令其レ然ラスト雖カ矣モ
此微以テ其理ヲ證ルニ定レリ故ニ見ルト鑒ルト其間有
壤ノ分別アルヲ以テ晓知セヨ其鑒察スルハ常ニ比較ニ因
ル是レヲ以テ汝今堂上ノ雛ヲ見ヨ其雛地上ニ在ルヲ時
ニ比スレハ殆微小ニ鑒察ス其微小ニ鑒スル所以ノモノ
ハ其雛生来ノ丈小及ヒ彼堂ニ至ルノ距離ヲ比較スレ
ハ也汝今汝ヲ去ル一四尺ノ榻ヲ見ヨ就カ大ナルヤ

○答曰未タ其理ヲ詳ニセス然レモ然スレニ四尺ヲ去ルノ
榻大ナラシカ而モ敢テ多分ノ差違アルヲ無カ如レ曰堂
多分ノ差違ナカラシヤ又何ノ処モ同シトセレヤ其理數
学ニ於テ明也今汝數学ヲ学ハ容易ノ明了スヘシ蓋シ一

尺六尺ヲ去ル榻ノ網膜ニ映スルハ四尺ヲ去ル榻ノ網膜ニ映スルニ比スレハ其
カナルヿ六十四倍ナルヘシ故ニ其見ルヿモ六十四倍ヲ
減スル理ナリ

○問曰數学ハ然リト雖モ予其榻ノ六十四倍ヲ減ス見ル
ハ論ナシ敢テ三倍ヲ減メ見サルハ何ノ故ヲヤ

○答曰然リ然レトモ今其榻ニ懸ルニ織條ヲ以テメ嘗中ヨ
リ其榻ヲ窺ヘシ然中ハ四尺ヲ去ルノ榻ハ一丈六尺ヲ去
ルノ榻ニ比スレハ過大ノ間大ヲナスヿ少セリ此理ヲ以
テ見ト鑒トノ差別ヲ定ハル是レリ故ニ今其塔ヲ見ヨ是
レ逆倒メ網膜ニ映スルヿ明ナリ然レトモ其塔ノ在ル所ノ
地及其塔上ヲ覆フ雲霞モ共ニ逆倒メ映ス是ヲ以テ吾輩
元リ地上ニ所在スルモノハ各直立スルヿヲ鑒定ス是他
ナシ其塔我輩ノ地上ニ直立スル如クニシテ四方物ヲ比
例スル地モ然ルヲ以テ嘗テ物影ノ網膜ニ映スルノ形状
ニ関セサルヿ故ナリ

○是故ニ物影眼目ヨリ遠ク隔ル二従其効影ノ網膜ニ映ス
ルヿ微ナリ是レ既ニ説所ノ距離ノ視線ニ因ル若シ其透
映甚ヲ微ニシテ物影ヲ審ニ分ツヿ能ハス或ハ其光気線
諸液ニ輪漕セサル時ハ我輩明カニ物体ヲ弁スル能ハス
然ルトキハ凸状ナル眼鏡ヲ以テ其微ヲ顕ニス

○今茲ニ眼目ノ顕ニ見ル所以ハ如何ンノ然ルヲ去ノ理ヲ
示ス可シ

○前傳説ノ所ノ外影遠ニ従減耗スル如ク近キニ従テハ能
ク増進シ其網膜ニ映スルモ亦尤モ明ニ故ニ物ヲ分明ニ
見ルト雖スル中ハ目ヲ近ケテ見ル所以ナリ○問曰人物
体ヲ審ニ目ニ近クルトキハ却テ明ニ見ルヿ能ハス是レ何
ノ故ヲヤ

○答曰人物ヲ明ニ見ルト欲セハ須ク目ヲ隔ツヿ七八寸許
リヲ要トス若シ人其体ヲ審ニ目ニ近クトキハ物体ヨリ生
スル光気線横斜ニ且ツ甚タ迫映レ眼常節度ニ恰合スル
眼中ノ機関ニ由テハ更ニ其影ヲ正シテ網膜ニ集縮スルヿ
克ワスシテ因中顕ス処ノ尤モナル網膜ノ裏面ニ至ラ
レム其部位ニ至テハ人外影ヲ解スルヿ克ワス

○而ルニ其体ヲ顕ニスルニ何ヲ以テスヘキ則チ物体ヲ目ニ密近シテ分明ニ見ントス雖ヒハ凸円ノ硝子ヲ用ユ此物其光気線ヲ内部ニ映セシメ因是ニ由テ収縮シ尚其光気線ノ眼中ニ射入スルヲモ通常ノ適宜ニ個膜ヘ収縮スルヨリモ速ナリ

○是レニ由テ人目ニ甚タ近キ物ヲメ分明ニ見ントス雖スルノ外ハ其凸円ノ硝子ヲ用ユ

○其硝子ノ物影ヲ倒大ニシテ個膜ニ産スルヤ其物体ヨリ一寸ヲ去ルモノニ比スレハ其大サ二百十六倍ナリ此理ニ準ヒテ老人ハ凸円ノ硝子ヲ用ユ是レ老人ハ角膜陷凹シテ是ニ由テ外影ノ透映減少シ光気素更ニ個膜ニ収縮セス其光気線唯目中ニ入ル所ノ如ク至リ以テ明ニ見ヘカラサルニ至ルカ故ナリ

○是故ニ其硝子ノ用角膜陷凹シテ其写映減スルカノ如キ外ニ用ユルヲナシ又人老耄ニ進ムニ至テハ益凸状ノ硝子ヲ要トス

○問曰其理詳ニ理書セリ然ルニ幼年ノ輩眼鏡ヲ用ユルヲ屢〻目撃セリ是何ノ故ゾヤ

○答曰其戯嬉ニ用ユルニ非レハ乃チ近視眼ナリ此カノ輩甚タ凸光眼ナリ是故ニ横書模写スルニ当テハ密ニ目ヲメ其物ニ近レム勢レモ其人却テ世人ニ比スレハ視力盛ナリ予屢〻其人ノ単眼ヲ以模写スルモノ其数倍恰モ眼鏡ヲ照レテ模スルモノニ勝ルヲ目撃セリ

○其人何カ故ニ鑑見スルニ密ニ其物ニ目ヲ近クルヤト云ノ理則チ条下ニ示如レ

○其眼形尤モ凹状ニヲ光気線ニ横斜スルカ故ナリ若シ其人物影ヲメ常例適宜ノ度ニ至ラシムルトキハ其光気線速ニ目中ニ入ル所ノ6m則チ硝子表ノ前面ニ於テ収縮スル是レ彼人ノ目ニ見ルヲ能サル所以ナリ如何トナレハ人明力ニ見ル所以ノモノハ因シテ其光気線ヲメ恰好ニ収縮セシメ以テ其部ノ神経ニ感セシムルニ由テナリ又其人世人ヨリ明力ニ見ルノ理ハ物体眼中ニ密ニ近クニ由テ其影ヲ分明ニ見ルヲ猶我輩ノ眼鏡ヲ以テ物影ヲ照見ルカ如シ又

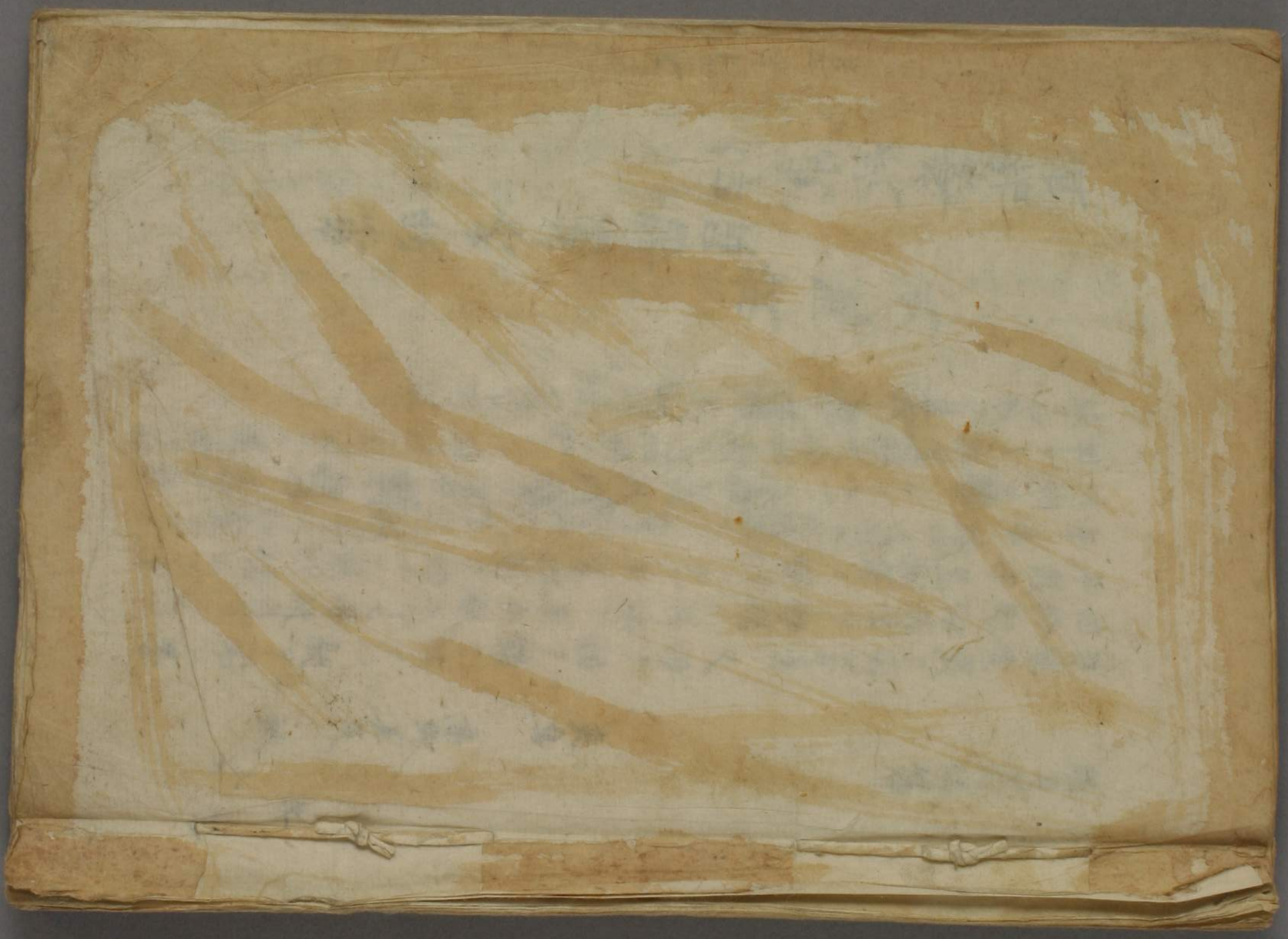
其人ノ視力是故ニ老耄ニ至テ愈明カニシテ且凹凸ノ眼
鏡ヲ用ルヲ希ナリ唯彼ノ患ル所ノモノハ市街ニ徘徊シ
諸物ヲ顯ニ見ヲ能ワス日書籍ヲ閲スルニ遠ク窺フヲ能
ワサルニ由ル

○究理学ノ精切ニ由テ凹凸ノ眼鏡ヲ製シ又此患ヲ救治ス
是其弟子ハ光気光ヲ敷丈ス是ニ由テ其光気像眼中ニ射
入スルニ先ツテ外部ニ屈曲セラレ終ニ網膜ニ至達セル
ヲルルヲ為スカ故ニ

○知来近視眼ヲ患ル人ト雖モ凹凸ノ眼鏡ヲ用ルカ為メ
ニ未往吾人ニ同キヲ得タリト云フ

于時文政十丁亥歳

於壽陽客舍

東羽未藩醫員　板鳳之

伊東救蔡祐直